

《ていだん》

中村利男氏



林 達次氏

## 同志社中学校の 思い出

—音楽を中心に—

澁谷昭彦氏

日本シューベルト協会理事長

神戸女学院大学名誉教授

同志社女子大学助教授

同志社大学経済学部助教授

林 達次

中村利男

澁谷昭彦



## 同志社中学校へ

澁谷 きょうここにお集まりいただいた方の共通項が二つあります。同志社中学に在学していたこと、音楽、特に声楽にかかわりを持っていくということですね。

音楽とのかかわりを中心にして、ごくざつくばらんに気楽に、当時の中学、高校の様子とか状況、それ以外のことについても、いろいろ思い出を語っていただくということになればと思っています。

自己紹介を兼ねまして、どのころに中学に学んでおられたかということをお聞きしたいと思います。まず林先生から。

林 私は昭和十二年に同志社中学に入りまして、十七年に卒業ということになっております。それから東京の音楽学校へまいりました。

澁谷 中村先生はどうですか。

中村 三十三年から三十六年まで中学校でのお世話になりました。そのあとは高等学校に行きまして、そして大学に一年間在籍させてもらって、そのあと桐朋学園大学に行つたと

いう経歴でございます。

澁谷 私は昭和二十一年に同志社中学に入學、二十四年の卒業で、入りましたときは旧制中学のいちばん最後で、まだ五年生がいたという時代です。途中で新制に切り替わり、私だけが男だけだったのです。私の一年あからは新制になり男女共学という、学制の切り替えの時期だったわけですね。それで二十四年に卒業して岩倉の高校に移り高校を昭和二十七年に卒業、あとは同志社大学へ進んだわけですね。

林先生の場合は旧制ですので、ずっと中学ですけれど、われわれの場合は、中学、高校の期間というのが、だいたい先生の旧制の中学に相当するわけですね。年代的に言いますと、林先生が昭和十二年からということですので、だいたいいまから五十年ぐらい前のお話だということになりますね。

林 ちょうどこの間、五十周年のクラス会をいたしました。

澁谷 私の場合が四十年ぐらい前、中村先生の場合が三十年ぐらい前の話ということですね。

中村 ちょうど十年ステップ。

澁谷 いずれにしても、ずいぶん古い昔の話ということになります。当時の中学の状況、先生方が入られたころの音楽、歌等々を中心にしてこれからお話ししていただくことにならるわけですが、自己紹介の続きで、音楽との出会いについて、林先生のほうからどうぞ。

林 私は昭和十二年に入ったわけですが、その前は小学校は実は京都の附属小学校ということがございまして、何しろかちかちの勉強ばかりの学校でございました。それから同志社に入ったということは、ある意味では私の子供心の中で一つのカルチャーショックだったのです。とにかく第一日からチャペルがあつて、そのあとオルガンやブラスバンドの部があつて讚美歌を歌う。ことに夏休みにキャンプというのが丹後の由良でありまして。

澁谷 そのころから。

## 音楽との出会い

林 はい。そこへ行ったら、何とまあ先生を呼ぶにもキャンパネームで、いわゆる二ツ

クネームで呼ぶわけですから、そういう人間関係のあり方というのが私にとつてもたいへんショックだったです。

そこで結局、私が音楽に本当に触れ合ったのは、やっぱりそのチャペルアワールの讃美歌で、そしてその中で一年生のときからホザナコーラスに入りまして、そこでやったということが私が実際に音楽に触れたいちばん初めだったと思います。結果から言いますと、そういう子供のときにハーモニーの世界に入れたということが私にとつてはたいへん大きなプラスで、いわゆる和声だとかそういうた学問で習う以前に、体の中で和音感、調性感というものが自然にできてきたということが本当にありがたいことだと思っております。その時分にそういう男子の中学校で合唱をやれたのは、恐らく同志社だけだったと思います。ただ、十二年というのはいわゆる日支事変が起こる年でございます、卒業しました前年に太平洋戦争に入っていきますので、同志社というものが戦争の中で大きく荒波に遭つていく時期でございました。

それで、ホザナコーラスから始まったわけなんですけれど、不思議なことに音楽学校に

入りまして、私のいちばん恩師である木下保という先生が、これは大音楽家で、大合唱指揮者でした。それからちょうど中村先生がお入りになった時分に私はウィーンに留学しておりまして、そこで偶然に師事した先生がフェルディナンド・グロスマンと申しまして、いわゆるウィーンの少年合唱団の総監督を兼ねていらして、合唱の大家でありました。もちろん声楽の先生として大家でしたけれど、ことに合唱部門でそういう方だったということとで、これは偶然が重なって、結局、私も声楽家としての道を歩きながら、だんだん合唱のほうに傾斜してまいりまして、ことに宗教音楽というのですか、教会音楽というのでしようか、そういったほうに自然に傾斜していったのは、その辺からの種がずっといまだに自分を支えているような気がいたします。

**中村** 私はこの中では戦争のあとで生まれているということか、男女共学になってからの生徒であったとか、いろんな意味で新しい世代に属するはずなのですが、私たちの子供のときというのは、社会の中に音楽がそんないろいろあつたわけじゃなく、ラジオから流れてくるドラマの音楽の中で小学校を過ご

し偶然にも同志社に入つて、私もホザナコーラスなのですけれども、ハーモニーの世界としようか、そういうようなものに浸れたということが、そのあとの人生をすべて決定しているような気がします。林先生も澁谷先生も名簿をつくつたりしたときに、いちばん初めのほうに名前があつて、どんな怖い人かなと思つていた先生ときやお話するなんて、何と時間が流れてしまったと思うのですけれども、本当に私たちもホザナコーラスというのが大きかったですね。中堀愛作先生がいらつしやつて、私達がいちばん最後だったです。私が中学から高等学校へ行つたときに中堀先生が引退なさつて、金田義国先生つて、いまサンディエゴにいらつしやる先生が、大学の聖歌隊から聖書の先生で来てられて、ちょうど交替された時期だったのです。

金田先生からはなんか新しいものにチャレンジしていく気持ちを植えつけられたような気がしますし、中堀先生が指揮されたハレルヤコーラスね、いつも子供心に感動しながら歌つていたのを思い出しますね。

あれを歌っていると、背中になんかゾクゾクつとするようなものを感じて、ああいうよ

うな気持ちがいまだに続けているものになつて  
いるような気がしますね。

林 私もいちばんの恩師は中堀愛作先生で  
す。二年生のときから愛作先生の奥様でいら  
した鶴子先生ってご存じだと思いますけれど  
も、ピアノを習いまして、それでだんだんに  
専門的な方向へ歩んだわけですけども、戦  
争中、同志社が戦時協力体制に組みこまれて  
いくときに、あの先生は何もおっしゃらない  
ですね、そういうことについて一言もお話し  
やらない。一つの頃は本当のクリスチャン  
の真髄を見たような気がします。

澁谷 私の場合はいまさつき言いましたよ  
うに、ちょうど戦争が終わって、終わったと  
たんに中学校へ入るといふ時期であつたわけ  
です。ですから入学試験と言いましても、ペ  
ーパーテストは全然なく、面接だけでした。  
入ったときは旧制、同志社も荒れていたと言  
えば語弊がありますが、終戦直後ですから食  
べるものもなかったし、上級生も予科練帰  
りの年を食うた人がいて、なんか恐ろしいよ  
うな雰囲気でした。父親も母親も音楽の教師で  
したから、家にピアノがあり、四歳のころか  
ら父親にいわれる早期音楽教育を受けまし

た。ピアノを習ったりして、環境がほかの人  
とそういう意味では全然違ったわけなんです  
けれども、結局、小学校二年のときに戦争が  
始まり、ピアノどころではないということ、  
早期教育がオジャンになってしまいました。

中学に入ったときに、もちろん毎朝礼拝が  
ありました。そしたらみんなパートに分かれ  
て歌っているわけですね。それでホザナコー  
ラスに入ったというわけです。一年生のとき  
には男声合唱だけでしたが、二年生になりま  
すと女子生徒が入ってきて、それも一年生だ  
けでしたから、人数が非常に少なく、女子生  
徒が大事にされたのです。最後の男子生徒だ  
けの学年というのは「本当におまえら、出来  
が悪い」とかなんかそんなことばかり言われ  
て、ひがみ根性丸出しの学年だったわけです。  
それで合唱は混声合唱をやったり、男声合  
唱をやったりで、いちばん最初はソプラノを  
歌っていてアルトに下がって、つぎにテナー  
になってベースになった。クリスマススの歌な  
んかはどのパートでも知っているということ  
です。当時は歌を歌っているというのと、しか  
も男でというのが何か後ろめたいような感じ  
の時代だったのですが、それを克服する一つ

の方法としまして、応援歌の練習をやりまし  
た。でかい声で応援歌の練習をやるというこ  
とを企てて、そういう点でちよつと評価して  
もらったところがあるのですね。もちろん讚  
美歌練習もやりました。

それから男の場合、声がわりが一時期ある  
わけですね。そのころ声が出なくなつて歌う  
のが嫌になつたのです。そのころは「六・三  
制、野球ばかりが強くなり」というのがあつ  
て、遊びと言えば野球ぐらいしかなかった。  
しかも野球が好きだったものだから、そつ  
ちのほうにのめり込みそうになつて、「野球  
部、来んか」というようなこともあつたので  
すけど、野球部には入らなかつたので、結局  
いまこんなことをしているわけですけど  
も。(笑)

その当時……音楽の話とは全然外れてしま  
いますけど、野球と言いましても道具も何も  
ありません。ビー玉にゴム輪を巻いたり毛糸  
を巻いたりして、ひょうたん型みたいな布を  
二つ縫い合わせてボールをつくりましてね、  
いかにかたいボールをつくるかというのが課  
題だったわけですね。いまなんか男も裁縫と  
言うてますけど、そのころはそれでやってい

たわけです。バットは角材ということで、むしろそっちの思い出のほうが強烈な感じがするのですけれど。(笑)何せ食べるものはなかつたし、おなかは減っていたし、ものもなかつたしというような状況で、靴でもまともな靴をはいているのはいなかったと思うのです。軍隊から払い下げの軍靴をはいているのがうらやましくてというような時代でしたし、オーバーも軍隊の毛布でつくったオーバーがいちばん上等だったというような大変な時代だったわけです。

林 そうすると、澁谷先生はグリーンにいらしたのは何年？

澁谷 それは大学に入ってからですので、昭和二十七年から三十一年までですね。

林 そしたらもちろん日下部吉彦さんなんか。

澁谷 日下部さんとは入れ違いになつていられるのです。

林 織田幹雄君だとか。

澁谷 織田さんは日下部さんより上なんですね。

林 そうか。なるほど。織田さんがホザナで私の一年下だったと思います。それから森

本芳雄先生がまだご健在。

澁谷 はい。森本先生と言いますと、私のころは高等学校で英語を教えておられたのです。森本先生は名簿を取られるのですけれど、返事をしてみんなが逃げていくのも全然構わないのですよ。(笑)高等学校の先生としてはやはり異色の先生だったと思います。『万葉集』の歌の英訳とか、受験勉強と全然違うことをやっておられました。もちろん英語として非常に役に立ったわけですけど、先生が音楽をやっておられるということを知らん連中がいました。そのころの連中というのは、クラシックをやっている者もおりますけれども、ハワイアンをやっていると、ジャズをやっていると、だいたいやんちゃな連中がそういう柔らかいほうの音楽が好きだったわけですよ。そして、その連中には逃げていくのが多いわけですけど、森本先生にジャズの話をしたら、先生がジャズのことをものすごくよく知っておられて、それからいかに尊敬しました。(笑)というようなエピソードがあるのですよ。

#### メサイアと合唱

林 あの先生……私はスタートはまず中畑先生の影響が非常に強いのですけれども、ちよど音楽学校を卒業しまして一年間大阪に勤めておりました、それから京都に帰ってきたのです。それが昭和二十二年だったと思いますが、ちょうど同志社混声合唱団が復活して、メサイアなんかやりました。その年の冬にいまの京都宝塚(京宝)、その時分、進駐車が占領しておりまして、あれは何て言いましたっけ、東京はアーニーパイルだったのだけれど、京都は何とかというような名前がありました、そこで進駐軍のためのメサイアがあった。何か独唱者が急にだめになっちゃって、晩、先生がうちへ見えまして「おまえ、歌え」とおっしゃるわけですよ。ところが、ぼくはバリトン、バスは得意ですけども、テノールを歌えとおっしゃる。テノールは保料一雄先生で急に病気になっちゃったと。そんなこと言っちゃって、ぼくはわりあい高い声が出るのですけれども、それでテノールでしよう、初めてのことでですから、それから一晩で

先生にたたき込まれまして、エヴリーヴァリ  
ーとか何だかむちゃくちゃで歌った。それが  
また機縁で、結局、同志社のそういつたほう  
へ戻るようなことになりました。森本先生か  
らいろいろ教えていただきました。

澁谷 メサイアでは林先生がバスを歌って  
おられるのは聞いたことがあるのですけれど  
もね。(笑)

林 はい。これは必死でやっただけで、どう  
ぞ来年は本来のバスを歌わしてくださいと。  
それからバスを歌わしていただくようなこと  
になりました。

澁谷 メサイアと言いますと、大学一年生  
のときに初めてメサイアを歌いました。あれ  
は合唱する者にとつては非常に有益な曲だと  
思いますね。

林 それがメサイアとのご縁で、何回やり  
ましたでしょうかね、これも。

澁谷 同志社混声と言えばメサイア、メサ  
イアと言えば同志社混声というような時期が  
ありました。最近ではメサイアも復活メサイア  
と称して、同志社女子大学のメサイア研究会  
と同志社グリークラブと同響と、それから女  
声の一般公募の混合でやっていますけれど、今

年も十二月二十四日にありますね。

林 そうですね。同志社のメサイアもそう  
いう体の中に血が流れているものだから、  
ご縁があれば元気な間に一ぺんやらしていた  
だきたいなと思っっているのですけど。なかな  
かいままでもちよつとご縁がないですが。

中村 いままでクリスマススイブかなんかぐ  
らいの京都の一つの風物詩みたいになつてい  
ますね。

澁谷 そうです。京都府、京都市、NHK  
から教育委員会、全部後援という形になって、  
京都市のイベントみたいな、京都会馆ももう  
この時期貸切り同然。

中村 どうぞどうぞですからね。

礼拝を通じて音楽を学ぶ

澁谷 中村さんのころのホザナは、中学、  
高校どちらでもいいですけども、どんな活  
動をなさったのでしょうかね。

中村 ちょうど過渡期だったのですけれど  
も、私が一年生のときにいま中学校で教鞭を  
執っておられる小倉恵子先生が初めて中学に  
来られたのです。中堀先生と二人でホザナコ

ーラスの面影を見ていたでいたのですけ  
れども、すごく、情熱がおありの先生で、そ  
れで一生懸命引つ張っていただいた記憶があ  
りまして、特にあの時分、難しい時期ですの  
で、いろいろな人間的にも指導していただきま  
した。

ただ、私らの時代になってきますと、コー  
ラスだけじゃなくて、いろんな分野の音楽が  
始まりだしてましてね。たとえば、はしだの  
りひことか、いまでもまだやっていますけれど  
も、彼なんかは同じ世代でいわゆる、ウエス  
タン・ミュージックですね、それをギターを  
使って、新しい日本語に、新しい音楽を乗せ  
ていく、動きが盛んになりつつありましたし  
ね。

あと、一つ思うことは、同志社のカレッジ  
ソングが英語ですよ。あれがわりと外国の  
歌に自然にフアツと入っていくことになつて  
いるのじゃないかな。日本語だけじゃなく外  
国語の言葉と西洋の音階とがスーと入ってき  
て、それから毎朝の礼拝がありましたからね、  
それは大きいですね。

林 ですから、教会音楽というのはやつぱ  
り理屈じゃないから、私も方々でいろんなも

のをやりましたけれども、同志社混声、学生混声、CCDですね、あれでやっているときがいちばんスムーズにいくのです。コーラルなんかでもふだん歌っている習慣といえますか、別にそういうそれぞれのメンバーが信仰がどうということはないと思うのですけれども、自然にそういうものがありますから。

**中村** そういうバックグラウンドがわりと異質なものでなく、入ってきたということはすごく大きいですね。いまでも女子中高では、クリスマスになったらページェントをやりますね。あれなんかあそこの生徒には、いわゆる西洋の文化のエッセンスのようなものが自然に入っていくのじゃないかなと思っております。

**林** 何かぼくは京都という風土にも多少そういうところがあるのじゃないかなという気がするのです。同志社というのは、私どもの時代は、もつともハイカラという感じだったのですね。だけでも、同時に京都という古い都の古い文化というものと、わりあいに対立しないで共存していけるような、まあそう楽なことではないと思いますけれども、私なんかは同志社でそういう外へ向ける目と同時に、

京都で伝統的なものへ目が向く機会が非常に多くございまして、そういう要素も同志社にはあったかいなというような気もするのです。

**中村** 大きいですね。そういうもの。

**林** この間もクラス会に出てまして、それでわかったのですけれども、五年前に私はローマのバチカンにご招待を受けてまして、ローマ法王のところへ、いまのパウロ・ヨハネ、御前演奏する機会を得たのですけれども、聞きましたら、その前の年に千の宗匠が御前でやっていらつしやる。それからその次の年に私の一年下でだけれど、能の金剛巖がやはりバチカンで、これは偶然なのですけれど、学年がちょうど一年ずつなんです。これは不思議だなって言ってましたのですけど、おもしろい感じがしますね。

**中村** ちょうど私ら中学生ぐらいだったとき、グリーククラブがすごく上手だった時期だったですね。まだ京響なんかもできたか、できてないぐらいの時期だったのですが、明徳館で合唱の練習をしておられた。森本先生のご息の潔さんですか、あの人がしておられたのを聞かせてもらって、何といひものだな

と思ったのを覚えてますね。そういう土壌が大きくて、いままさぐく合唱は盛んになってますけれど、いまの日本のすごいパーセンテージが同志社に寄っているのじゃないですか。いまの一般の合唱団なんかでも、かなりレベルの高いのを指導しているのは同志社の出身者が多い。

**澁谷** そうですね。京都だけではなくて、神戸なんかでもね。

**林** 神戸中央もそうだし、評論部門では日下部さんが大きな存在ですしね。

**澁谷** 中村仁策先生も同志社ですね。

**中村** 浅井さんなんか。

**澁谷** 浅井敬壹君ね。京都アカデミーの桑山博君でしよう。コンクールで上のほうの一位、二位というのは、全部指揮者は同志社ですね。

**林** そうです。

**中村** それを思ってみても、その土壌というものは、あまり言われてないことかもしれないけれども、深いでしょうね。

**林** 案外深いですよ。

**中村** みんな土壌が同じだから、みんなが好きなように自分の感性を大事にしながらそ

のままやってたら、結果的にそうなっていた。それを見ると、すぐ同志社の出身の人が多かったみたいで、わりと同志社の本質的なところをそんなところで具現しているような気がしますね。

林 この間も五十年ぶりにみんなが集まりますと、自分達は本当にやんちゃくちやの悪戯鬼の集まりみたいな連中だったのですけれども、集まっているんな話をすると、やっぱり五十年生きてくる上でチャペルで受けた教育というのは、非常に大きいことをみんな言っていますね。その時分、本当に悪戯鬼で、礼拝中に絶対静かにしないのですから。

#### 礼拝の思い出

澁谷 中学、高校の礼拝、やかましいですよ。ところが、礼拝を出席とって強制的にやらされるのが嫌でというような連中が、卒業していまの年になって同窓会をやるうかと言うとき、さあ何しようかとなると、いちばん最初に礼拝しようと言うのですよ。それだけ心の中に残っているのでしょうか、思い出して。

林 だから私、宗教教育なんてそんなものだと思うのですよ。目の前で見えるものじゃないのだから。

澁谷 高等学校の話になりますけど、私は高等学校で毎日、チャペルで話を聞いていたけれど、覚えている話ってほとんどなくて、一つだけ覚えているのは、グラント先生が岩倉へ来て話をされ、「礼拝堂の中からお便所見えます」って言われたこと。それだけです、覚えているのは。(笑)何と詰まらんことを覚えているのかと。

林 人間の印象なんか本当に不思議なものですな。

澁谷 私らの場合は礼拝のときにレスポンスとか讃美歌を歌っていましたから、精勤に出ていたわけですけどね。

林 私らの時分はもう悪戯鬼ばっかりですから、チャペルの二階で足を踏み鳴らすわけですよ。いまは重要建造物になっているから大変ですけど。

中村 私らのときでも、「昔はみんなまじめやった、いまはひどくなった」と言われていたから、いまもたぶん同じことを言われているのでしょうかね。

林 そうでしょう。

中村 ほんとは昔はもつとひどかったかもしれないのに。(笑)

林 ぼくはやはりそういう、いま言ったように期せずしてなってくるような音楽のあり方というのが音楽にとっても大事なことで、日本の音楽の流れで、ご存知のように、一つは文部省を中心にしたいわゆる東京音楽学校ですな、そういう流れと、それからこういう同志社だとかそういう教会を中心、キリスト教を中心にした流れと二つがあつて、これがやはり相当大きな力だと思ふのです。日本の作曲界の二大原流である山田耕筰先生、信時潔先生、もやっぱりお若いとき、山田先生は関学出身ですな、信時先生は大阪の教会のクリスチャンです。山田先生は野に下つていらしたし、信時先生は音楽学校の教授と、このお二人が大きな流れになってますから、同志社の日本における音楽の意味というのは大きいですな。

中村 私もそれはほとんど偶然から同志社の女子大学の音楽科に奉職させてもらうことになったわけですけども、今でもそういう方がね、加藤テイ先生とかがおられますな。

林 本当にお元氣ですね。

中村 ええ、元氣元氣、まだうちの学校にはもつと下の世代で有賀のゆり先生だとか駕淵紹子先生とかいらつしやいますけれども、同志社と音楽と一緒に生きてこられた方というのはずいぶんおられまして、そして、中瀬古和先生ですね、亡くなられた、何て言うのでしょうか、スピリッツというのでしょうか、そういうものを感じさせられましたね。

林 私どものときは、男子の中学ですから女子部の校舎へは行けません。ただ、同志社イブのコンサートのときだけは手を振って行けるわけなんです。だからそれがみんなうれしくてね。

中村 入れなかつたですね、門がバツと閉まつてね。

澁谷 混声合唱をすること自体が、「男女七歳にして席を同じゅうせず」でとんでもないこと。混声合唱をするのに片桐哲先生が女子部のほうへ頼みに行かれたとか、なかなか大変だったらしいですね。ということは、当時、混声合唱していたのは、ほとんどなかつたということですね、逆に。

林 そういうことですね。いまから考えら

れないようなことですね。

中村 抑圧されるほうがやりたいなとか、前向きな気持ちというのは出てきますからね。

林 そうなんです。あれはあまのじやくなんです。人間のね。音楽学校でも私どもが入ったときは戦争の真っ最中ですから、唯一の共学の専門学校なんです。けれども、入る門も違うし、廊下で会つてもものを言っちゃいけないのです。用事があるときは生徒課長のところで立ち会いでしゃべらなきゃいけない。ところが、実際はそうでなかつたですけど。(笑)悪いやつはちゃんとやっているのですけれども。スリル満点ですね。

中村 日本人というのはそういうおかしな、律義な部分がありながら、西洋の文化を貧欲に取り入れてきたのでしょうか。向こうへ行つてわかることは、精神的なバックボーンについての何物かが同志社には豊富にあつたということでしょうね。

林 そうですね。

澁谷 われわれのころに比べると、最近の人は音楽的な環境が全然ちがいます。小さいころからいろんなオーディオ機器なんかが発

達してて耳が肥えていますね。音感も発達してますし、いろんな楽器もあるしすばらしい音楽を聞くことができます。われわれのころは模範が何もなかつたわけでしょう。とにかく集まつて歌つて、別に人に聞かせたいとかそんなこと全然なくて、自分たちだけでとにかくハーモニーをきれいにつくろうということをやつていたわけですね。いまはどうなんでしょうね。いまの音楽、また合唱でもいいですけども、何かやろうとしたらレコードやCDからコピーしてきて、これをやるというようなのがあるのじゃないでしょうか。

林 それは非常に多いです。だから、やたらにいろんなことは物知りで、カラヤンのレコードはどうだとかこうだとか、だれのがどうとかということは言うのですけど、じゃおまえはということになると、なかなか難しいですね。

中村 でもそういう意味では底辺は技術的に豊かになつてきてますね。

林 それはもう大変なことです。

中村 私は澁谷先生の弟さんの和彦さんが一年先輩でしたけど、彼が固定の耳を持つていたので、要するに絶対音感ですね。い

まの子なんかみんな大なり小なり持つているのですけれど、そういう人がいるということは、すごく物珍しいかったです。あの時分は、いまはもうそういうことが当たり前になってますね。

### パイプオルガンとチャペルの思い出

林 私のもう一つの中学のときの思い出は、栄光館にパイプオルガンが入ったのですよ。あれが昭和十五年ぐらいじゃないでしょうか、記録を見ればすぐわかりますが、森本先生がパイプオルガンというものについての説明をいろいろ教えてくださった。へえーと思って、でき上がって聞きに行ったらびつくりしましてね、何とでかい音がするものだろうと思って。

澁谷 パイプオルガンというのはすごいと思つたのは、ちょうど舞台の後ろでしょう。それで壇の上に乗って、ガツと鳴りますと下が動くわけです。これはすごいなという感じがしましたね。自分の体も揺れるような、床が揺れて。(笑)

中村 私の母親は同志社とは関係ない人間

だったのですけれど、同志社にはパイプオルガンというものがあるんやでとか言うてね。なんか日本に二台しかないのや、(笑)やたら二台目というのを聞いてますけど、だからそういう関係のない人も知っていたのですね。

林 一つは音楽学校の講堂にあつたのですけど、いまでも残ってますけど、本当にお粗末なオルガンなんですよ。同志社に入つたのはかなりあの当時としては機能的によくなつていたのですけど、ただ、残念なことにあのホール自体がオルガンを置くようにつくつてなかつたですから、空間の響きがよくないですから。

澁谷 そうですね。全然反響しない。なんかスーとこうね。

林 反響しないですから、吸い取り紙ですからね。

澁谷 放送局の中にあるような感じで反響がなくて。

林 でもそれでもその当時、びつくりしましたからね。

中村 やっぱ栄光館と中学校のチャペルのね。

林 この二つがやっぱりね。

中村 そうですね。チャペルもそういう空間として、音楽をやっている者の心に残っているのじゃないかな。

澁谷 チャペルが改修されたのですけど、ご覧になりましたか。

林 いや、まだ。

澁谷 中を見られるのかな。

林 一べん拜見したい。というのは、私、卒業していちばん初めのリサイトをしたのはチャペルなんです。昭和二十二年の十二月だったと思います。

中村 あれは形もいいですよのね。あれは同志社のいちばん最初の建物みたいですね。彰栄館と。

林 いま彰栄館はくつついてしまいましたね。

澁谷 くつつきましたね。あれはちよつともつたない。

われわれのいたころの古い建物は醇厚館とか立志館とか、あこはつぶされてしまつて、新しいものが建っていますけどね。

中村 そうですね。

澁谷 岩倉のチャペルというのはもう。

中村 そのときにはできてました。でもまだ、運動クラブは、前の高等商業学校の建物が残ってまして、そこでやってみましたね。宝池まで道一本しかなくて、授業をサボってようポートに乗りに行ったりしましたけれども。いまは本当に様変わりしましたね。

### リベラルな校風

澁谷 私らが岩倉へ移ったときは、中学を卒業して全部移ったのです。全部移ったというの、いままで全部今出川にいたわけで、上級生は高等学校が今出川だったのです。われわれのときに一年、二年、三年ともども岩倉へ行ったのです。そういう意味で、私は高校四回目ぐらいの卒業なんですけれども、岩倉へ移転したときには一年生、二年生、三年生一緒に行ったわけですから、三年生が一年生に教室がわからんからって聞いたりするところがありました。

そのころの高校では、生物なんか一年生で取ってもいい、二年で取ってもいい、三年で取ってもいいというシステムでした。そして一年生で私らが取ったら同じ教室に三年生

がいたというようなことで、学年の交流がなかなかうまく行きましたね。

中村 おもしろかったですね。

澁谷 ですからホザナなんかみんな一緒になつてね、そのクラスの一ところに固まつたりしてね。いまはそれはないんじゃないですかね。

林 そうですね。

澁谷 三年生と一年生と一緒にというのはちよつと考えられないでしょう。

中村 変革期というのはおもしろいですよね。

林 あまり事が整つてしまつと、やつぱり世の中はおもしろくないので、多少ごたごたしているほうが。(笑)

中村 まあ性格にもよるかもしれませんが。

林 私なんかはごたごたのほうが好きなんですよ。(笑)

澁谷 そうですね。惰性に流されるよりも少々緊張感があるほうがね。

中村 同志社には、そういう人が多いかもしれないですね。決められたことをきちつとやる人があまりいないというか、(笑)少ないか

もしれないですね。

林 そういうきつと決められたことをやるというよりも、いまおつしやつたように、ちよつとあいまいなところがね。

中村 たとえば制服というものがなかったことが、あれも大きかったですね、私らのときは。同じ人間を鋳型にはめてしまつというのじゃなくて、そんな派手な華美なものじゃないけれども、何でも自由なものを自分に合わせたいいなね、大きい意味で言うたら、個性を大事にすることを、恐らく意識的にやつてられたのだと思うけれども。

澁谷 戦前はどうかだったのでしょうか。制服つてあったのですか。

林 それは軍国主義の時代ですから。

澁谷 みんな戦闘服かなんか。  
林 ええ。

澁谷 それ以前はどうだったのでしょうか、もつと前は。

林 その時分はずいぶんリベラルな気風が多かつたのじゃないかと思えますけれどもね。

中村 澁谷先生の場合は自由だったでしょうね。

澁谷 制服どころか、着るものがなかった時代でしょう。だから制服なんか考えられなかった。

中村 ぼくは小学校は公立しか知らないですけれど、そこもわりと自由にさしてくれたんですけれど、同志社へ来たら別の世界みただったですね。

林 そうですね。私なんかも本当に先ほど申しましたけど、小学校が非常にかたい学校でしたから、ここへ来て本当にちよつとびつくりしました。でも、それがまたたく間に戦争の波に沈没していく時代だったですから。

中村 その時分はまたその時分だけで、みんなそういう体験をしてられる方がお話しなさったらおもしろいでしょうね。

林 それは本当におもしろいですよ。

### 同志社教育に期待するもの

澁谷 林先生が中学におられた時期というのは、学業を途中で中断してとか、そういうことはなかったわけですか。たとえば夏にもう卒業とか繰り上げ卒業とか、それはまだなかったのですか。

林 それはまだございませんでした。けれども、五年生ぐらいになると、もう夏休みはなくなつて、動員されたりいろいろありまして、四十人ぐらいの間かな、一クラスが。四クラス、A B C D。

澁谷 私のとときも四クラスでしたね。

中村 ぼくはもう五クラスか六クラスあつた。E組までありました。五クラスね。

林 四クラスで、入ったときは平等に分けてあるわけ。二年生のときでバツと編制が変わりまして、いいのから順番に。私は偶然二年生まではよく勉強したのでしょうか。一番いいクラスに行きました。それから今度は三年生になるときは、だいぶとたがが緩んできてC組になり、四年生ではD組で、全部クラスを回り歩いて、最後は何しろ受験でしょう、勉強できないし、おまけに多少反抗期もあつたりいろんなことが手伝つてやったものだから、とうとう各クラス巡業いたしましたね。この間、会つたらクラスメートがたくさんいるわけなんです。全部そうなんで、おもしろいです。

澁谷 われわれのところは中学へ入つて、組

は私はD組だったのですけれども、卒業するまでそのままでした。高校もそうだったですね、卒業するまで同じ組。

林 だからその時分から、それまでは同志社というところは、中学ということが中学のランクから言えば、やっぱり公立が京都で一、三、中というのがありまして、こういう私立というのはランクが低かつたのですけれども、その時分から少しづつ上がつてきたようですね。私は附属小学校とかかちかちのそういう教育のところで、たいがい一、二、中、三中に入るのですけれども、落つこちやつて同志社へ来たのですけれど、案外そのとき本当はよくできるのに一、二、中をしくじつて同志社へ来た連中が多いのです。その時分から少しづつレベルが上がつてきて、私の一年下に江崎玲於奈がおりまして、彼はその時分から特別の秀才だったのですけれども、それどこか公立をしくじつて来ているのです。その時分から同志社のそういつたレベルが効率的に上がつてきたのじゃないかと思うのですけれど。

中村 私らのときは、同志社はずいぶん難しいのだよといううなはしりぐらゐのとき

だったですけれども、それでもその中でたとえばそのまま上がつていく子と、自分で目的意識を持って、外へ出て行く子は、本当の意味でクリエイティブな心を持った子がずいぶんいましたね。いろんな人間がごちゃごちゃしていたという思いは、自分の人生にとつて大きなことですね。

林 私なんかいいときに入れていただいたので、いまだつたらとてもとても門前払いです。(笑) とてもじゃない。

中村 私らでもそうでしょう。それは。林 同志社中学へ行くなんていうのは、もうとんでもない。どうしてこんな難しくなっちゃったのでしょうかね。

澁谷 どうしてでしょうね。

中村 みんながよいと言うからでしょう。澁谷 親が出た学校には子供は入れないとかというようなことも言われますしね。皆が勉強するようになったから、それ以上にやらないと入れないというような面も出てきますね。

中村 それからいまはマスコミみたいなものが発達しているから、全部に情報がいきますものね。昔は全部が全部知っているわけ

もないし、全部が全部大学へ行ったわけでもなかったからですね。

林 あんまり入学試験が難しくなってくる、おもしろい人間はちよつと入りにくくなつてきますね。

中村 そうでしょうね。

林 どうしても、そこでまず型にはまってしまうというふうな、そこが一つの問題だと思えますけれども。

中村 その辺というのは、ぼくはすごく遅くになってからアメリカやヨーロッパへ行ったりしたのですけれども、日本と絶対違うなと思つたことというのは、向こうの人間というの、たとえばクラスで四十八番やという人間でも、その人間はひとりの人間としては何の卑下もなく、大威張りして生きているわけですよ。いまの日本でたとえば五番から下になったら人間じゃないみたいだね、ああいう感性というのはすごく恐ろしいなあと思えますね。

ただ、そういうことが同志社に入るためには小学校で一番やなかつたら入れないみたいだね、まあそれはそれで同志社にとっては結構なんだけれども、日本の本当の文化にとつ

て、それが必要なことなんかということですよ。

林 本当にそうだと思います。

中村 思いますね。特にこういうことは、ペーパーテストで何点とらなかつたらだめだとおっしゃる先生には、ちよつとわかりにくいことかもしれないけれども、私らみたいに音楽とかをやっていると、どうしてもそういうことよりも、もつとクリエイティブな心のようなものが自然にそなわつた人間を育てていくというのでしょうか、そういう考え、少なくとも同志社はある部分でしてほしいなと思えますね。

林 そうですよ。私もそれを非常に望みますね。

心にゆとりを

澁谷 いままでのか、最近のといふべきなのか、効率よくやる、能率を上げるというところで、なんか経済的人間、要するにすぐに役に立つとか、効率を上げられるということばかりを目指してきて、技術的にはかなりむだなくいくけれども、本来、人間として

あるべき心のところで欠けてきて、他人に対する思いやりが全然ない。競争、競争ということで、とにかくできるだけ狭い視野でまっしぐらにという、競走馬みたいなね。

**中村** その目的だけで日本ができてしまっているでしょう。私たちはこの次の世代を育てていくために、絶対に心しないかんことやないかなと思うのですけれど。

**澁谷** 戦後のすべてが荒廃した時期は、ある程度それは必要だったと思うのですよ。とにかくそれをやらないと、生きていられないということがありましたからね。

**林** そうそう。それのおかげさまでここまでできているのだけれども、これから先はもう少しゆとりというのでしょうか。

**中村** そのままやっていたら、本当におかしいですものね。本当に日本人はおかしい。

**澁谷** 反省されてきているし、言われてきていますけれども、それじゃどうしたらいいのかというのがなかなか出てこない。

**林** そうです。それがなかなか出てこないです。

**澁谷** ですから日本のいわゆる経済人、企業の戦士が外国で仕事は同じようにやるわけ

ですけれども、仕事が終わったあとでパーティーとかレセプションに呼ばれていったら、話題が全然ない、何もできないということであるというようなことを聞かれますね。

**林** そうなんです。それは音楽でも何でも同じことです。

**中村** ヨーロッパはそういう日本人を締め出してきましたね。技術よりも本当に人間としての魅力のある人間が音楽をしていくべきだという考え方を、やっぱり基本ですからね。初めはそれはヨーロッパにしても、技術的にすごいのが出てきたらびつくりはしますけれども、でも、もうびつくりしてくれない時代です。

**林** もうびつくりしてくれない。ですから入学試験なんかでもその判断がね、先ほどもおっしゃったように、一般教育の場合でも私は成績、ペーパーテストでいい点数というよりも、もつと人間的なものを見る方法はないかと思うのだけれども。

**中村** 大学までできてからやるのは手後れですね。

**林** やっぱり中学というのは大事です。

**中村** 小学校でも子供の時分から。同志社

中学に入るために、塾に入らなければならぬみたいなね。やっぱりどこかおかしいなと思うのですけど。

日本人は戦争が終わってから横ばっかり見ながら生きてきたような気がするのです。隣の人が洗濯機を買わしたとか、隣の向こうがテレビを買わしたさかいにお父ちゃん、頑張りみたいな感じのね。そういうものの見方をしてきて、それで目標は何やったというところと豊かになるという点だけしかなかった、ヨーロッパとかアメリカでしたら、少なくともそこそこ神さまがいて、神のもとに平等やないかという考え方をするのですね。本当は日本より全然平等じゃないのになんか神のもとに平等だと言うて、ある種の秩序が保たれているというか、日本はこれがないから、一センチ違っても、それはいけないとか不平等だとか何だとかということ、みんな人間を一種類にしてしまふ、ああいう発想をするのじゃないでしょうか、こんなこと私だけが言うていてもしかたないことですが、だれかが言うて、みんなが考えてやっついていかないと、変なままで世界のまま子になつてしまいます。



お母さんの影響が大きいのと違うかな。日本の女の人というのは、ものすごく負け嫌いやという気がします。隣の人に負けたらあかんというような。(笑)

女性は一一般的に、男よりシビアかもしれません。

林 女の人はシビアです。

中村 だから日本の戦後の文化は、女性がつくってきたのと違うかなと、このごろ思っているのですけどね。お父ちゃん、頑張りやということ。どんどこどんどこ働いて、働いた結果、何もなくてね。

澁谷 平均的に考えて、女性のほうが文化的な生活をしているのじゃないですか。

林 そうかもしれません。

澁谷 文化的というか、より豊かさをエンジョイしているというのか。

中村 だから本当の意味で賢い女性がたくさんふえてくると、どうせだんなというのもしりにしかれる動物やから、もうちよつと豊かになっていく可能性が出来るかもしれない。あの人に負けても構へん、だけど、もうちよつと大事な時間をつくらうというように考え方を、みんながするようになるというの

ですけどもね。

外圧がなかったら動かない国ですからね。

林 そうです。まったくそのとおりです。

(笑)

中村 ただ、その規模が何万人単位じゃなくて、億の単位ですから、日本はね。一年間向こうへ行っているとき、テレビのない生活をしていたのですけれども、テレビがなかったかて何ていうことないですよ。全然何ともない。でも日本へ帰ってきたらほんまに、だれだれちゃんがどないなったというのを知らなかつたら、つまはじきにされるみたいなことでしょう。あほみたいな国やなって本当に思ってしまったのですけどね。それが日本、世界で一番金持ちになつているのですからね。

澁谷 日本はどこでもテレビがあるね、そう言えは。

林 こんなチャンネルが多くて朝から晩までやっているのは、アメリカと日本だけぐらいいですか。

澁谷 アメリカではしかし、テレビが映らない地区があります。有線テレビを買つても白黒のおんぼろテレビで、線がいつぱい走つ

て見にくいというのが多いですよ。

中村 日本人は、スピーカーのやかましい、安物のひずんだ音が好きですな。

駅の構内なんかでも、あんなだけギョアギョア言わんですよ。だけど、平気です。平気というか、むしろなんか鳴っているほうが安心する。

林 安心感があるのかな。

中村 たとえば横にいる人、隣、みんな同じ日本人で同じ言葉をしゃべる人はびっくり寄っているのに、何が不安なんやろなと思うのです。(笑)

林 とにかくいまデパートへ行つても、喫茶店はもちろんのこと、ろくすつぼしゃべれる喫茶店がないでしょう。どこへ行つたつて、それから夏に田舎の湖のようなところへ行つても、ラウドスピーカーでガーガーと言っている。静寂というのが全然なくなつちやつた。

中村 あれはほとんど暴力だと思っただけだね。でも、日本人は暴力だと認めないと思えますね。それはそういう意味では礼拝もや

かましかつたかもしれんけど、話ほもとに戻るけど、(笑)礼拝でお祈りでもしなさいみた

いなことで、静かに考える時間というのが与えられていることというのも、ある意味においてはやかったのかなと思ったりしますけれどもね。

林 先生方は大学で教えておられますが、やかましい授業がありますね。

### 個性ある人間の教育を

林 あります。

林 私もやかましい授業はあるのですけれども、結局、話がおもしろいやつぱり静かになるのですね。少々これは興味があるかなと思つて言つて、興味があつたら、静かになるのですね。やつぱり内容かな（笑）という気がするのです。それはこっちの責任でもあるわけですけど。

林 それはそうです。

林 やつぱり興味あることは聞いてますね。

林 そうね。この二十一世紀というのはとても大事な、人間が生きていく上で大事な世紀になるでしょうね。

林 そこでいま教育界で反省されている

ようなことは、すでに新島先生が言つてられることばかりですからね。

中村 たとえばいちばん怖いのは、企業なんか有能な人間はつくるけれども、個性的な人間は要らんという部分が多いですね。

林 はい。組織としては。

中村 パーツになれと。それを国じゅうでつくつていくから、同志社はほんまははみ出し人間ばかりつくつていた学校やつたけれども、それもあんまりつくつたらあかんよみたいなことがあるのじゃないかなと思つてね。学校の先生がこぞつてはみ出し人間をつくるようなことをしたらいいのと違うかなと思つてます。（笑）

林 少なくとも、つくらんでもいいけれども、はみ出した人間の価値を認めてやるだけのことできれば、それでもずいぶん違うと思うのですよ。私なんか本当にはみ出し中のはみ出してA組からD組まで歩いた。（笑）よく卒業さしていただいたと思うのだけども。

林 いろいろお話は尽きないのですけれども、「同志社中学校の思い出―音楽を中心に」ということでしたが、だいぶあつちこつ

ち曲がりくねつて、音楽談義から教育論までいつてしまいました。まだまだ言い足りないというところもあるかと思ひますけれども、どうでしょうか、このあたりで、何か特別にということがあればおっしゃつていただいたらと思ひますけれども。

林 別にございませぬ。しかしながら、歴史というものは、伝統というものは続いているのだというふうには私思ひますので、樂觀はして居るのですけど。

中村 そういうことというのは大事かも知れませぬね。私の場合には妄言多謝でございますので。（笑）

林 それじゃお忙しい時期にお集まりいただきまして、長時間、どうもありがとうございます。

（一九九〇年十二月二十二日収録、於有絡館担当理事室）